

## 齋藤公男門弟、日本郵政に有り 構造家・城戸隆宏

朝倉幸子◎TH-1  
illustration:Taco

### ■負けん気は野球から

立板に水とはこの人をいう。頭の回転が早いうえに会話が巧みで、そのうえポジティブ志向の構造家が城戸隆宏さんである。1972年、城戸木工所を営む父の元東京に生まれる。無邪気な幼少期を過ごした後、野球少年となる。日大二高でピッチャーとして活躍するも怪我で離脱してしまう。負けん気の強さから途中で投げ出すのは潔しとせず、スコアラーになってチームを最後まで支えたという。

父親の影響か、物づくりには潜在的に興味があったらしい。期せずして中学2年生で国立代々木競技場を見て、俄然建築に目覚める。形をつくる基本の構造という世界に。

### ■齋藤公男先生ありきの今

日本大学理工学部へ進んだのは城戸さんには必然であった。硬式野球をやっていたからドーム設計の第一人者である構造家・齋藤公男さんを師としようと決めて入った大学なのである。自ら設定した道、ストラクチャーエンジニアリングを極めたい城戸さんにとっては齋藤研究室へ入室するのは不可避であった。「大学院まで面倒を見てやる」と齋藤先生に認められ、研究室へ入ったのは自慢のドラマである。その中で切磋琢磨してきた城戸さんがいよいよ巣立つ時、就職先への強いリクエストを齋藤先生にぶつけたのだった。6か月間、授業前の教授を捕まえてお願いし続け、山下設計への推薦状を勝ち得たのでした。時期的に教授の推薦が不可欠なころ、熱意に折れて意を受けた齋藤教授も徹底する方だったのが成功の道だったのでした。



自分を冷静に分析し、組織設計事務所の一員として構造に携わっていくと決めた。山下設計に絞ったのは、当時大空間をあまりやっていたから！というところがユニークだ。バックボーンのしっかりした安定性ある組織で、将来的に自分が活躍できる分野があると判断。「自分が入って大空間をやりたいのだ」という発想からなのでした。

六本木ヒルズの担当は29歳の時。齋藤先生と研究したMJG（ガラス点支持構法）を建築主にプレゼンテーションして売り込んだ。そして、念願の齋藤先生と一緒に大きな仕事のできたのだった。

山下設計での恵まれた面白い仕事がひと区切りした頃、日本郵政に出向を命じられる。当時の上司には「詳細はわからないが、君にとっては悪い話ではない」と。しかし、出されるからには戻らないと意地をもって日本郵政へと向かったのでした。

### ■宝の山『日本郵政』

紆余曲折あった中で、2013年日本郵政施設部建築計画グループの一員になる。組織には優秀な若手技術者が入社して活気付いているし、グループリーダーになって今断然楽しいという。郵政グループは高層建築や制振構造、免震構造が多いため、技術顧問は和田章先生にお願いしている。大きな力をバックにして設計したいという想いが、この組織で達成できつつあるのだ。転職して、数多くの制振構造、免震構造を担当した。さらに遠くない将来には、恩師の齋藤先生とも大空間建物をつくりたい。その恩師から教えられた、「ものをつくる喜び」を部下たちと分かち合いたい。自分にとっての六本木ヒルズであるように。

本誌2023年2月号に掲載されている[広島JPビルディング]は近年の代表作。広島市の陸の玄関口である広島駅周辺の整備や、将来的なJR広島駅との直結も視野に設計を進めた。確かに凛とした存在感のある姿を現している。組織ではCLTも使うことなど、着々と新時代への準備が進んでいる。所有する数多くの郵便局をベースに巨大な土地を有する組織であるからこそ、できる建築へ城戸さんの腕は鳴るのでした。